

## 長い枕

....ってというのは、無粋の極みですが

## 労働 — 協業と分業 —

### 「読む」とは

- 『資本論』のような本はどうやって読んだらよいのだろうか？
- よく読めばわかる。
- って....
- わからん！
- 「読書百遍意自ずから通ず」...お経じゃないんだ。
- 読み流す。「わかる」とこだけは「わかる」。当たり前、でも、まったく進歩なし。
- 捨い読み。同意できるところだけ、メモしておこう。なんのため？
- 「マルクスもいっているように...」なんて、文字通り、枕に...
- 「マルクスをして語らしめる....」同じ文章でも、あなたが書けば誤りで、マルクスの書けば、正しいのか？
- 権威づけ。これは最悪！

### 「わかる」とは

- 「わかる」ってどういうことか？
- そいつがわかれば苦労はない。
- 「わかりやすい」「わかりにくい」で「評価」する。
- 「わかりやすーい」というのは「カワイー」というのと同じくらいダメ。私の好みが絶対ヨ。
- 「正しいことはわかりやすく、間違っていることはわかりにくい。」それならハッピー。
- 「わかりやすいものは正しく、わかりにくいものは間違っている。」苦労ないね。
- 「正しくてもわかりにくいことはある、間違っていてわかりやすいこともある。」

### 「わかる世界」と「見えない世界」

- 経済に関する事柄は、多くの場合、一見当然に見える姿かたちをしている。
- お金でモノが買える。はたらいて賃金をもらう。銀行にお金を預ければ利子がつく。土地は地代を生む....
- でも、なぜ、買えるのか？と質問すると、とたんにわからなくなる。
- 見えないものが見えるものでおおわれている、っていう感じ...
- 「物象化」なんていってみたいくなるが、
- こういう言葉はやバイなので、知っていても、自分で使うのはよすほうが賢明。
- この種の隠語（ジャーゴン）にたよると、しまいには、自分で自分が言っていることがわからなくなる。日常性からの逃避。
- わかる仲間ができる。朱に交われれば赤くなる。『資本論』オタク。
- こうして迷路にはまる人は多い。

### 「通読」と「精読」

- 二通りの読み方：通読と精読
- 読み取る。全体の流れを....
- 各章がそれ自体独立に意味をもつ、というのではなく、関連している。
- ある事柄があると、そこに含まれている複数の要因が原因となって、新しい事柄が生じる。
- これを、論理的な「展開」といい、「展開」の原因となる要因を「契機」moment といったりする。

### 「通読」と「精読」

- 「要因」factor というのが、複数の要素をただ並べるだけ、という語感を伴うので、こんなふうなのでしょう。
- 「展開」を通じてつくりあげられた全体を「体系」system という。
- 『資本論』は長いけど、こうした展開を通じて、資本主義の全体像を描いている。
- だから各章の「展開」をたどって、終わりまで読んでみる必要がある。通読。
- ただ、どこで終わりが、どんな終わり方なのか、には注意。ミステリアスな書物。
- どんなふうにかかれ、刊行されたのか、次回にでも、ちょっとだけ話してみます。

- でも、ただ、全部読めばいい、というわけではない。
- 大事なポイントは、しっかり読み込む。
- 前回「二時間かけて一段落ですか」って呆れられていらした方がおりましたが、そうすべきポイントもあるのです。
- 逆に、何時間でも議論できる文章を書くってスゴイと思う。
- いくつかの読み方が可能である。曖昧と複雑とは違う。
- 対立する要素が関連している。複雑な現象を理解するには避けて通れないところ。右からみれば丸く、左からみれば四角にみえる....
- こういうところは、区切ってキチンと論理を追う。分析的に読む。精読。

- 精読すべきポイントでは、何が書いてあるのか、いくつか違った読み方を試してみる。
- ただ、これを自分一人できると自信をもって言い張れる人は、ちょっと自分の心の有りように気をつけたほうがよいかも.....
- 「みんなで読む」ことのメリット。今日の話の「協業」の効果。
- これとの対比でいうと、「分業」は、差し詰め、みんなで分担して翻訳してくるようなイメージでしょうか。<sup>1</sup>

<sup>1</sup>余談ですが、退職したら「銀座経済学研究所」というのを開こうと夢想しています。「みんなで読む」そして「互いに論じあう」、そんなところです。

- 精読するときには、自分の考えを紛れ込ませてはならない。
- 書いたのは、見ず知らずの赤の他人、とって距離をおき、向き合う姿勢。
- これで自分の考えを客観的に見つめることができる。
- 囲碁で打つ感じでしょうか。
- 物語を読むように、同感し没入できる、楽しい読書じゃない。
- 太宰治の小説を読むのとは逆.... 自分だけに語りかけてくるような、共犯関係にはいるような一体感
- でも実は、『資本論』にもそうした魅力が潜んでいる。みんなには誤解されているが、自分だけにはわかる、ホントのマルクスをつくってはいけない。

- また、わかろうとすれば、すでに知っていることに結びつけたいくなるのは人情というもの.... これも要注意。
- 「例をあげると....」というのは必要かもしれないが、でも手がかりでしかない。
- 書かれている抽象的なこと（一般理論）と、自分の見知っていること（経験知）が、具体例で重なる。部分の一致は、全体の一致ではない。
- というわけで、ちゃんと読むには、けっこう禁欲が求められる。
- 何が書かれているのが、自分にわかる言葉で表現しなおしてみる。これが「解釈」である。
- 「...と思われる」「...ではあるまいか」「...と読めなくもなはない」などと言葉尻を濁さないで、しっかり、真偽がわかるように言いきる気合いが大切だ、とつくづく思う今日この頃です...
- でも、解釈のための解釈じゃ、意味がない。
- 次にその解釈した内容（命題）が正しいかどうか、真偽を判断する必要がある。これを「批判」という。

- こうして、わからないことがわかるようになることを「知る」という。
- 「わかりやすい、当然な、当たり前に見える世界」の下に隠れている「新たな世界」が開ける。
- 「わかりやすい世界」を当然のこととしてみているかぎり、世界を変えることはできない。
- 隠れている見えない世界を「知る」ことで、いまアタリマエに見えている世界とは違う別の世界を考えることができる。
- 「知る」ことは「変える」ことにつながるんだ....
- って、ちょっと、ダマした気がする。
- こういうもっともらしい話は、まず疑ってみよう。
- わかったつもりになること、これを破壊するのがホントの学問なんだ、
- って、かなりアナーキーかも。
- でも、これでずっと生きてきたんだ....

## これまでの話

- 第1回目にお話したように、『資本論』では第1巻第1章、はじめのところから、商品の価値を説明するかたちで労働が登場する。
- しかし、それは商品を生産するのに直接・間接に必要な労働時間、というかたちである。いわば過去形。
- 商品の価値は、その生産に直接・間接に必要な労働時間によって決まる。
- 労働力商品の価値も、同様に、その生産に必要な労働時間によって決まる。
- その結果、必然的に利潤が生じる。
- 搾取の説明が目的。

- 労働力の価値＝
- 1日生きてゆくのに必要な生活物資を生産するのに必要な労働時間＝
- 必要労働時間（たとえば4時間）；
- 労働力の使用価値＝
- 労働そのもの；
- 1日の労働時間＝
- 1労働日 working day（たとえば8時間）；<sup>2</sup>
- 労働日は、必要労働時間をこえて延長できる。
- 1日分のネット接続料を払った。何時間接続するかは自由だ。
- 労働日 - 必要労働時間 = 剰余労働時間

<sup>2</sup>1日何時間はたらくか、という意味。何日はたらいた、という意味ではない。単位は何時間/日。working day に想定する言葉は日本語にはない。労働日というと「1ヶ月のうちのはたらいた日数」みたいで混乱しそう...

- 第2回目にお話ししたのは、労働がどのようになされるか、という現場の話でした。
- 『資本論』では第1巻第5章第1節の「労働過程」です。ここの労働は、いわば現在進行形です。
- ポイントは
- 労働者はまず目的を設定して、その実現を目指して、自分の心身と、そして外の正解を、コントロールする。  と  の分離。

17 / 32

## 協業

### そもそも「協業」とは

- では、その「協業」とは何か？
- 協業は Koopeation (cooperation) の訳語で「協力」の意味。
- おそらく「分業」の対比で「協業」と訳されたのだろう。
- 協業という用語は、分業に比べて日本語として定着していないので、最近では「協働」などという人もいるが...
- 因みに「分業」というのは division of labour (Teilung der Arbeit) で、文字通り、労働の分割。だったら、明治の頃に「分働」っていう訳語があってもよかったのかも...
- それはともかく「協力」ってどういうことか。「協業」と「分業」とどう違うのか？

21 / 32

### 現象としての協業

#### S.348-9

結合労働日は、それと同じ大きさの、個々別々の個別的労働日の総和と比較すると、より大量の使用価値を生産し、それゆえ一定の有用効果を生産するのに必要な労働時間を減少させる。

23 / 32

- 「労働過程」を人間社会の根底をなすものとして、合目的活動として広く捉えたことは決定的な意味をもつが、
- 問題点は、その労働が個人的労働におわっているところにある。
- 「構想と実行の分離」は、他人の目的を自分の目的として労働できる能力に発展する。
- 労働は社会的な労働なのだ。
- 労働者と資本家の関係を理解するカギは、個々の労働者の関係と、労働者と資本家の関係、この二つの関係の間に潜む。
- この論理をたどると、第11章「協業」につながる。

18 / 32

### 分業との違い

- アダム・スミスは『国富論』を何から説きおこしたか？
- 「分業」である。
- スミスは近代社会の経済的基礎を生産様式を分業とみたのである。
- マルクスは、資本主義の第一の基礎をなす生産様式は分業ではないという。
- では「資本主義的生産様式の基本形態」をなすものはないか？
- それは「協業」なのだ、というのである。
- 第11章の最後の文章を読んでみよう？
- 因みにマルクスは、資本主義的生産様式を何から説きおこしたのか？
- 「商品」である。
- スミスが「分業」(生産) → 市場 なのに対して
- マルクスは「商品」(市場) → 生産 となっている点はおもしろい。

20 / 32

### 『資本論』における定義規定

#### S.344

同じ生産過程において、あるいは、異なっているが連関している生産諸過程において、肩をならべ一緒にあって計画的に労働する多くの人々の労働の形態が、協業と呼ばれる。  
「諸力の協同 (Concours de forces)」(デスチュト・ド・トラシ『意志および意志作用論』、八〇ページ)。

- Concours って、コンクール？ かなり、さり気ない定義。トラシといえば、イデオロギーという用語を最初に用いた思想家としてよく知られたあのトラシ、そのトラシまかせの....
- イギリスの division of labour に、フランスの Concours de forces を対置した感じ。
- 資本主義の基礎をなすのは、スミスのいう分業じゃなくて協業だ、っていいのなら、しっかりスミスを批判したらよいのだが、一言もこれにはふれていない。

22 / 32

### 現象としての協業

#### S.348-9

一定の場合に、結合労働日がこの増大した生産力をもつようになるのが、労働の力学的力能を高めるからであろうと、労働の空間的作用部面を拡大するからであろうと、生産の規模に比べて空間的生産場面をせばめるからであろうと、決定的瞬間に多くの労働をわずかの時間のあいだに流動させるからであろうと、個々人の競争心を刺激して彼らの生気を張りつめるからであろうと、多くの人々の同種の作業に連続性と多面性との刻印を押すからであろうと、異なる作業を同時に行なうからであろうと、共同使用によって生産諸手段を節約するからであろうと、個別的労働に社会的平均労働の性格を与えられるからであろうと— いずれの場合にも、結合労働日の独特な生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力である。

24 / 32

## 現象としての協業

S.348-9

それは、協業そのものから生じる。労働者は、他の労働者たちとの計画的協力のなかで、彼の個人的諸制限を脱して、彼の類的能力を発展させる。

- いろいろな現象が例示されている。
- 何が協業の本質なのか。
- 労働者が集まることで自然に発生する効果
- 内部から形づくられる効果
- 一人一人バラバラにはたらいっていたのでは生みだせない力
- $n$ 人の結合労働力 > 個人的労働  $\times n$ 人
- 集団力と競争心

25 / 32

## 競争心

S.345-6

多くの力が一つの総力に融合することから生じる新しい力能は別としても、たいていの生産的諸労働の場合には、単なる社会的接触によって、生氣("動物精気")の独自の興奮と競争心が生み出され、それらが個々人の個別的作業能力を高めるのであって、その結果、二人が一緒になれば、一四四時間の同時的な〔共同の〕一労働日で提供する総生産物は、二人の個々別々の労働者が各自一二〇時間ずつ労働するよりも、または一人の労働者が一二日間続けて労働するよりも、はるかに大きい。このことは、人間は生まれながらにして、アリストテレスが考えるように政治的動物ではないとしても、とにかく社会的動物であるということに由来している。

27 / 32

## 資本の力

- 資本は賃金労働者を買い集めることができる。
- 集団力はだれのものになるのか。
- 資本がバラバラの独立の生産者に勝てるのは、この社会的力を個別の力として利用できるから。
- だから「資本主義的生産様式の基本形態」は「協業」ということになる。

29 / 32

## 指揮監督

- 『資本論』の指揮監督論には、"指揮監督が不可欠だ"。資本家はこの指揮監督を通じて集団力を我がものとする"と見なす傾向が強い。
- 集団力は、第一に労働者間の関係として生みだされる。内生的。
- 労働者を買い集めれば発生する。資本の力は、多数の労働者を集める力が根本。
- プラス 指揮監督や生産過程の設計・調整など。
- 外部から指揮監督しないと集団力は生まれず、と見なす立場は、社会主義になっても計画の優先、テクノラートによる指揮監督を重視する結果になったのではないのか？
- 搾取論のコアをなすのは、集団力をだれが我がものとするのか、集団力を形成する主導権・決定権をめぐる対抗関係ではないのか？

31 / 32

## 集団力

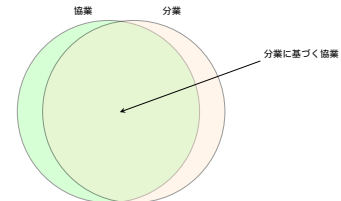
S.345

騎兵一個中隊の攻撃力または歩兵一個連隊の防御力は、各騎兵および各歩兵によって個々別々に展開される攻撃力および防御力の合計とは本質的に違っているのであるが、それと同じように、個々別々の労働者の力の機械的な合計は、多数の働き手が、分割されていない同じ作業で同時に働く場合—たとえば、荷物を持ち上げたり、クランクを回したり、障害物を取りのぞいたりしなければならぬような場合—に展開される社会的力能とは、本質的に違っている。この場合、結合された労働者の効果は、個々別々の労働者によつてはまったく生み出されないか、またははるかに長い時間をかけてようやく生み出されるか、もしくは小規模でしか生み出されないか、であろう。ここで問題なのは、協業による個別的生産力の増大だけではなくて、それ自体として**集団力**であるべき生産力の創造である。

26 / 32

## 協業と分業の関係

- 「協業」と「分業」の原理的な区別ははまだ不完全...
- こんな状態では教えることはできないので、教科書では...
- 協業と分業を区別する原理を明らかにし
- 現実の労働組織は両面合わせもった「分業に基づく協業」だと説明している。



- 詳しいことは『経済原論 — 基礎と演習 —』にまかすとして、協業のポイントは

28 / 32

## 指揮監督

S.351-2

資本家の指揮は、内容から見れば二面的である — それは、指揮される生産過程そのものが、一面では生産物の生産のための社会的労働過程であり、他面では資本の価値増殖過程であるという二面性をそなえているためである—とすれば、形式から見れば専制的である。協大規模に発展するにつれて、この専制は、それ独自の諸形態を発展させる。……封建時代に戦争および裁判における司令が土地所有に固有なつきものであったように、産業における指令は、資本に固有なつきものになる。

- 「一面では」「他面では」というが、「指揮監督」は集団力の形成にとって不可欠か？
- あらゆる社会にみられる指揮監督と、資本主義に特有の指揮監督がある、というのはちょっと優等生的....

30 / 32

## まとめ

- 『資本論』の「労働過程」では、労働の本質を合目的活動と規定した。この点は重要。
- 「構想と実行の分離」の可能性 他主体の設定した目的を自分の目的として受けとめて実行できる能力 集団力はまず内部から自然に生まれる
- 『資本論』では、この側面が隠れてしまっている。そのワケは....
- 『資本論』の表の論理：商品経済の等価交換のルールにしたがって、個別労働者から剰余価値が搾取される。市場を残して搾取を廃絶することはできない。社会主義の基本は、市場の廃絶、計画経済である。
- 指揮監督労働の不可欠性 計画経済のもとで指揮監督権を握る官僚
- 20世紀の「社会主義」を原理的に支えてきた『資本論』の読み方を見なおしてみよう。

32 / 32